

平成三十年七月一日発行 第二十八巻第七号 通巻第三二五号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐 かい

平成30年7月号

岡井省二創刊



# 卒業

高橋将夫

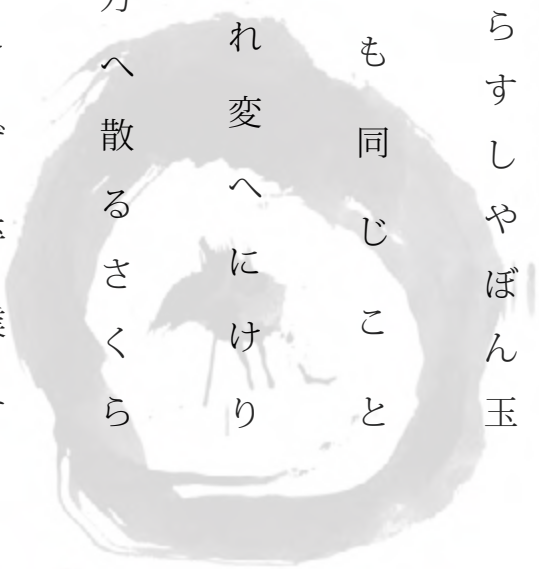
ふ  
ら  
こ  
こ  
を  
漕  
げ  
ば  
心  
の  
伸  
縮  
す

花  
の  
無  
き  
花  
見  
や  
話  
は  
ず  
み  
た  
る

飯  
蛸  
と  
な  
つ  
て  
ジ  
ャ  
ン  
グ  
ル  
ジ  
ム  
く  
ぐ  
る

大  
仏  
と  
シ  
ー  
ソ  
ー  
を  
す  
る  
万  
愚  
節

シューベルト幼子薔薇の香に眠る  
田楽の串信長が抜きにけり  
わが息を虚空に散らすしやぼん玉  
陽炎や夢も現も同じこと  
春潮も時流も流れ変へにけり  
大勢のかたむく方へ散るさくら  
何一つ卒業できず卒業す



# 槐安集

水野恒彦

永却の一瞬に生き雪の果  
密やかに咲き寂<sup>じやく</sup>と散る山桜  
余生などと思へば亀の鳴く日かな  
楊貴妃桜人の気配に総<sup>さと</sup>くあり  
言の葉の欠片ちりばめ春秋ふ

加藤みき

楊梅を山中に得し神饌に  
すかんぼや川幅に水滔滔と  
栗の花どこまでも男と女  
無花果の花御霊はわれの中にある  
旨さうな青梅の香の満ちあふれ

中島陽華

ふくべ雛鍵屋の表開いてをり  
婆さまに顎ひげ一本鯨起し  
とりどりの赤絵もうれしわらび餅  
のぼせもんホトホト那珂の時鳥  
鳴引くや酒のほひの藏の上

竹内悦子

京洛の仮面西行櫻かな  
朧夜の麒麟の切手貼つてをり  
一枚の空一枚の花筏  
兜煮の眼うるうる春の宵  
竹林の空の揺らぎや夏の蝶



雨村敏子

晩年や緑の風を臆に腑に  
鯛の潮待つてをるなり櫻かな  
老いゆくはさすらひに似て草の餅  
花は葉にひとに花時ありにける  
丸三角四角ピカソの夏帽子

本多俊子

龍天に登る青鯨の群つれて  
詩心を探るゆき暮れ蜷の道  
柳絮とぶ天竺山のはるかへと  
きみどりの風見えてくる若楓  
玉垣に赤き実のあり招魂祭

近藤喜子

あうんの距離に双蝶の舞つてをり  
薄ぐもり春の愁ひに似たるもの  
蜜蜂を憂国の土と見てをりぬ  
誰もぬない鞆轆ゆらしぬるは誰  
あはあはと海市の中に古代都市

瀬川公馨

空海に学びし多元墓  
くらがりの盗人鼠春を咬む  
バラ銭を投げるや茜苔の花  
噂の厚みを増して来たりけり  
ぽつかりと空いた蛇穴へびの息

久保東海司

春窮や鬼悉く童子にて  
縄文の怪物のつとかの子の忌  
ストッパーをどれから外さう春の昼  
日本の洗濯日和風光る  
知恵詣色気づくまで天才児

柳川 晋

春塵と対峙してゐる睫毛かな  
踏青や人それぞれの重さ抱き  
見えぬ星見えてくる星春の星  
ガラシャ井の蓋をおぼろが蓋をする  
校門といふ春風の出入口

熊川暁子

踏み出せばなんとかなるよ遠霞  
おとがみ 頤をしぼし遊ばせ豆の花  
旅の始めは燃え立ちてゐる躑躅山  
老鶯の洗礼を受く旅靴  
春筍や人は脱皮をしたきもの

寺田すず江

球場の半分暮るる遅日かな  
騒音を騒音で消す五月祭  
お城へと一本の道花明り  
桜守桜の花に見守られ  
若芝の校庭子等の声を吸ふ

岩下芳子

花水木うつむくことは嫌いです  
海渡るつもりは蝶と会ひにけり  
思ひ出は決して濁らず雪柳  
風船は風の行方を尾行せり  
囀に混じれず鴉撫然とす

近藤紀子

桜さくら愛でる命のあればこそ  
精霊の宿りし大樹囀れり  
引鶴のいつしか宙に混じり合ふ  
春愁や己がこころの狭かりし  
この蝶は誰の化身か親しげに

岩月優美子

桜蕊の残りの色を掃き寄する  
道草やどこへ寄りしか春の泥  
春耕の黒き土くれ匂ひたつ  
太短き虎杖たおる音のよき  
ゆく春はどこへ行くのかあかきたな

竹中一花

ビル街に緑の雨と遠汽笛  
村々を巡る谷水燕来る  
日を背負ひ緑摘みける翁かな  
天網をくぐりてさくら櫻かな  
火をくべる海女の齡の語らざる

前田美恵子

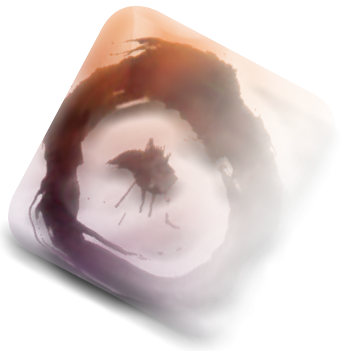
きき耳を立てて入りゆく春野かな  
腑に臓に木魚のこだま法然忌  
花冷や宿曜すく凶まうと出にける  
人生の道程未だ朧かな  
春闌くや麒麟ゆつくり近づける

中田禎子

夕桜墨書に色のありにける  
春障子五感鋭くなりける  
やすらぎの胎内なりき花の下  
三角州の草の高さや揚雲雀  
春の大三角恐竜の卵

吉田順子

花衣夕暮れてなほ匂ひ立つ  
さくらしべ地球へ音を敷きにけり  
風光る鳥獣戯画の動き出す  
老鶯や引きしまりゆく轆轤の輪  
花は葉にすでに未来をみつめをり





# 槐市集

犬塚季里子

たつぷりと水遣りし茄子立ち直る  
炎昼を途方にくれて探しもの  
ひとり寝の朧を抱き夢に入る  
菜の花に川ゆらゆらと曲りけり  
あめつちや一人居となる大朝寝

井上静子

ゆすらうめ稚を抱かせてもらひけり  
囀りに体操する手弾みをる  
耀市に声の飛び交ひ飛魚はねる  
長閑さや渾名で呼んだり呼ばれたり  
治まりし姉弟げんかチューリップ

今井充子

長閑さや微笑む雲を見送りにて  
此所に居る朱色際立つ立雛  
宇宙より落下物あり万愚節  
持ち替へて挨拶交す春日傘  
彼岸会や仏壇浄め戻り来る

岩田洋子

春暁の山一山づつ見覚めけり  
春昼や黒潮の帯銀色に  
春光に誘はれてをる深海魚  
学ぶ事未だに多し松の芯  
きのふより波音遠し朧月



植木戴子

むらさきの種袋あり朝曇  
UFOを見たと言ふ子やソーダ水  
木のベンチ夏の匂いにしてをりぬ  
屏風 山星の形の花の響  
和食器をどれにしようか草の餅

江島照美

はじまりは頼りなげなる初桜  
クローバの声聞く少女指差すよ  
入学式演技を見する二年生  
つくしんぼ束ねて朝の訪問者  
はかなくてさびしくて舞ふ桜かな

大塚たきよ

揚雲雀 藪を越えて中空に  
ひと杓子ほんにかはゆき甘茶佛  
山藤やハイカーたちの賑々し  
献血や遠き昔の花の頃  
歳時記に杉のしをりを康成忌

岡田桃子

下萌えの棚田を統ぶる白土堀  
花醍醐酔はねば花に近づけず  
桜湯の花味はへり花の宿  
県境の根雪に落花又落花  
ゆづられし特等席の花吹雪

荻布貢

逃水や一桁違ふ宝くじ  
身の丈の味覚を啜る蜆汁  
越前の海青々と蓮如の忌  
花万朶風たをやかに空青し  
大都会の砂漠のオアシス花の下

久保夢女

連れ舞の蝶々第三展望台  
誰や彼かあさまがゐて桃の花  
ニコニコと日の本は今花の時  
花に酔ふ狐狸妖怪もこの吾も  
一期夢誰が言ひ初めし花の宵

# 槐集

## 高橋将夫選

葛藤をしばしあづけし朧月  
大阪 藤田美耶子

魂帰る吉野の山の花ふところ  
次の世の入口めけり花の道

鎮魂の祈りささげて苗木植う  
ふらここや今日も誰かを待つてゐる

空と言ふものを見たさに蝶生る  
大根の花を選びし天使かな

初花を手折りし吾は大悪人  
花の下差す手引く手も神遊び

何もかも差し出してゐる花の前  
花おぼる精舎に浮かぶ鎧武者

蓮如忌や自力で飛び初むシャボン玉  
鳥帰る撰取不捨の風の中

春大根抜かれ観念並びけり  
春泥を羅漢唯今托鉢中

久保 夢女

亀鳴くやいのち三十八億年  
大阪 江島 照美

帰るべきそれは幻想古巣かな  
精霊のかすかに揺るる花筏

人の世の婚姻色や春の宵  
笑みなくも笑みが見えたり都踊

春風に投げ出す恋の放物線  
守口 三木 亨

挫折とは拳打つたび散る桜  
視界から此の世を消して蝶もつる

凧消えし空に残れるキリトリ線  
よく鳴くやサド侯爵の池の亀

海に出て飛花天竺の風に乗る  
枚方 橋本 順子

竜天にコップの水の震へけり  
土の塚まあるく盛られ桃の花

蛇穴を出づるや五欲もどりたる  
飾り羽根を拾うてゐたる花の山

# 銀河往來

高橋將夫

◇『空』（柴田佐知子主宰）七七号

俳句展望

深川 淑枝

消えないと氷つてしまふ冬の虹

高橋 将夫

（俳句界）十一月号より）

冬の虹は儂いものの代名詞であろう。束の間に消えるのを残念に思いつつも、ずっと消えなければ氷つてしまうという発想に、虹の消えていくことを仕方ない青わされる。移ろっていくものを惜しむ心に詩情を感じる

◇槐集観照

ふらここや今日も誰かを待つてゐる

藤田美耶子

言われてみれば確かにそんな気がする。人が漕いでこそその鞆だから。この鞆は作者。作者は今日も何かを待つてゐるのだろうか。

（葛藤をしばしあづけし朧月）、（魂帰る吉野の山の花ふとこる）、（次の世の入口めけり花の道）、（鎮魂の祈りささげて苗木植う）の句、どれもみな作者の確かな精神の風景。

空と言ふものを見たさに蝶生る

久保 夢女

爽し氣に宙を舞う蝶に対する作者の感懐。憧憬。

（大根の花を選びし天使かな）の「大根の花」と「天使」、（初花を手折りし吾は大悪人）の「大悪人」など、この作者の発想、着眼には独特のものがある。その根底にあるのは「何もかも差し出してゐる花の前」の句にも見られるおおらかさではないだろうか。

花おぼろ精舎に浮かぶ鎧武者 平野 多聞

景は明確。その先、どんな物語を連想するかは読者の自由。

私は花と精舎から無常の世の落武者を連想したが、必勝祈願の武者の姿かもしれない。

（蓮如忌や自力で飛び初むシャボン玉）、（鳥帰る撰取不捨の風の中）、（春大根抜かれ観念並びけり）の句はいづれもこの作者ならではの世界。

人の世の婚姻色や春の宵 江島 照美

婚姻色は繁殖期に現れる目立つ体色。春の宵はそんな雰囲気を感じさせるといふのである。この作者ならではのユニークな感性と思ふ。

春風に投げ出す恋の放物線 三木 亨

「恋の放物線」が衝撃的。「春風に恋を投げ出せば放物線を描く」といふ。「春風と恋」の抒情と放物線の理知の二物衝撃である。

それでいて、実に理にかなっている。上昇し、やがて下降するのが恋だからである。

（風消えし空に残れるキリトリ線）の句、消えた風の残像が切り取り線で囲まれて残っている。「昨日の空のありどころ」が想起される一句。「キリトリ線」の片仮名表記は実にこまやかな配慮。

（よく鳴くやサド侯爵の池の龜）の句「龜鳴く」の古典的季語と「サド侯爵」のミスマッチが痛快。

この作者の発想の飛躍とその豊かさには常々感心させられてゐるが、今回は特にその感を深くした。

蛇穴を出づるや五欲もどりたる 橋本 順子

無欲の冬眠から覚めたら途端に欲望が目覚める。生の本質に

迫る一句。

〔竜天にコップの水の震へけり〕の句、竜が天に上る大景をコップの水のかすかな動きに結びつけたのが手柄。

〔海に出て飛花天竺の風に乗る〕はその自由奔放さが魅力。

遙かより祈るほかなし星隴 大塚李里子

震災の際など、救助にかけつけたくともできずに、ただ無事を祈るしかない。まこと、「祈るほかなし」ということが多いのが世の中。

シャボン玉のりて宇宙へ旅の夢 柴田 靖子

次の「連れ舞ひて青き空ゆく春颯」の句と共に、春天がおおらかに詠まれていて心が和む。

さくらさくら余生を飾る並木道 中 貞子

余生を飾る桜の並木道。その精神の位相に共鳴する。

壺に納まる花大根の天地かな 井上 静子

大根の花咲く大地と空。壺の大根の花にはそれらが無い。壺だけがこの大根の花にとつての大地なのだ。住めば都か。

春闌ける短か過ぎたる導火線 中西 厚子

過ぎゆく春を惜しんでいる。惜しむというより残念がついているのだろう。導火線が短かすぎたと悔いが残る。一体何があつたかは読者の想像に任せられている。

花筏一寸法師漕ぎ分けて 竹村 淳

花筏と一寸法師のメルヘンの世界。

裸電球の蔵の美人画幣辛夷 庄司久美子

裸電球のもとでの美人画。場所は蔵。なんとも心にくい景で、思わず採らされる一句。幣辛夷もいい。

〔また固き金色堂の路の暮〕は素直で好感のもてる一句。

植木屋の運んで来たる初夏の風 中島 昌子

爽やかな初夏の風の中を植木屋がやってきた。「植木屋」が実によく効いている。

〔万愚節魔女の一撃くらふ魔女〕は発想がユニーク。

春風や湘南あまねく恋うづく 高野 昌代

湘南へは行ったことないが、確かにそんなイメージがあると  
思う。春風と春の波と青春と恋。

〔春惜しむアナログ時計は時惜しむ〕はアナログ時計の長針の動きが目に見えてくる。

弥次郎兵衛花風に酔ひ踊りける 阪倉 孝子

弥次郎兵衛が風にゆれている。花見の酒に酔って踊っているという見立てがユーモラスで楽しい。

〔籠夜やひらがなのごと眠りける〕の「平仮名のような眠り」の比喩もうまい。

宇宙は愛愛は宇宙へ花万朵 岩田 洋子

愛の大きさがよく伝わってくる。花万朵がめでたい。

〔春の闇匂ひの迷路に迷ひ込む〕の句、闇で何も見えないから匂いが頼りなのに、それがまた迷わせるという。春の闇の本質に迫る。